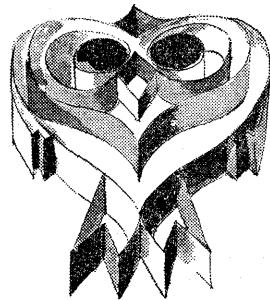


子どもが泣きべそをかくとき

榎沢良彦

子どもを持つ親なら誰でも、我が子に強く育ててほしいと願うことだろう。その願いが強いあまり、些細なことでも（大人にはそう見える）子どもが泣き出すと、「しっかりしなさい」「そのくらいのことですぐ泣くものではないですか」等々と、子どもを励ますお母さんも多いことだろう。そのようには言わないまでも、子どもが泣くこ

とに対して、「意気地がない」とか「弱虫だ」等の否定的なイメージを持っている人は多いのではないだろうか。私たちはつい「強いこと」に肯定的評価を与えてしまうために、「泣く」という行為が子どもの発達過程の中に占めている位置を見落としてしまうのではないだろうか。私自身も「泣くこと」には否定的イメージを持って



いた。ところがある日、この「泣く」ということを私に再認識させてくれる出来事が起きた。ここにその出来事をとり上げて、「泣きべそをかく^(一)」ということについて考えてみたいと思う。

——ある出来事——

ある養護学校で、始業式のあった翌日、新年度最初の授業日に、次のような出来事が起きた。

遅くん^(二)が加藤先生（男性）に抱かれてトランポリンのある部屋にやって来る。加藤先生は遅くん一人をトランポリンにのせ、トランポリンをするようにと勧めらる。遅くんは先生から離されたとたんに泣きべそをかき出す。遅くんは泣きべそをかきながらも、つかまり棒につかまって一人でトランポリンをとび始める。その様子を見て、加藤先生が遅くんの向かい側にのり、一緒にトランポリンをとんでやる。すると遅くんはとたんに笑顔になる。（一九八五年四月十二日の記録より）

この記録を読んだだけでは、何故遅くんが泣きべそをかいたのかよくわからないだろう。それには正当な理由があったのである。

実は、新年度になってクラス替えがあり、遅くんは二年間使い慣れた教室から新しい教室に移ることになった。始業式の日、彼は教室が変わったことを告げられ、ひどく動揺し、新しい教室に入ることを頑として拒んだのだった。そしてその翌日の朝、この出来事が起きたのである。彼はいつものように、旧い教室に入るつもりで元気に登校して来た。ところが、または新しい教室に行こうと誘われ、彼は動揺してしまった。遅くんは加藤先生に抱っこしてもらい、何とかその動揺を抑えて一旦新しい教室に荷物を置きに行った。その直後、遅くんは先生に抱かれてトランポリンのある部屋にやって来たのである。

この日の朝、遅くんはいつもの教室に行くつもりで来た。ところが、新しい教室に行こうと誘われて一種の衝撃を受け、動揺してしまった。遅くんはその衝撃を、加

藤先生に抱いてもらっていることで克服していたのである。しかし、完全にその衝撃から立ち直っていたわけではなかった。そのため、トランポリンの上に一人で立たされた時、遅くんの心にさきほどの動揺が蘇ってきてしまい、彼は泣きべそをかき出したのである。恐らく一人にさせられたことで、彼は心細くなったのだろう。それを察して加藤先生と一緒にトランポリンののつてくれたことで、遅くんは再び強くなったのである。

これが、この出来事において遅くんが泣きべそをかいた理由と経緯である。これだけわかれば、もうこの出来事は十分理解されたと言えるだろう。しかし私は更にもう一步踏みこんで、遅くんの心理を洞察してみたい。そこで私が注目したい点は、「遅くんが泣きべそをかきながら一人でトランポリンをしたこと」である。私にはそれがとても重要な意味を持っているように思われる。洞察を始める前に、遅くんの今日までの成長過程を簡単に振り返っておこう。それが、遅くんのこの行為をより深く理解するための手助けとなるだろう。

——昔の遅くんと今の遅くん——

今から四、五年位前までの遅くんは、馴染みのない大人が近づいて来ると非常に動揺し、激しくその接近を拒んでいた。動揺のあまり、自傷行為をすることもあった。彼が心を許せる相手は親しい保育者だけだった。自分の要求が保育者に聞き入れてもらえないと、遅くんの心は容易に傷ついた。また、自分の遊んでいる所に他児が割りこんで来ると、遅くんは一目散に保育者の許に逃げこみ、保育者の胸に顔をうずめるようにして抱かれるのだった。

やがて遅くんは自分の方から積極的に他者に関わっていくようになった。今では他児に玩具や遊具を取られても、逃げ出すどころかそれを奪い返そうと試みるようにさえなっている。以前には、些細な事で傷つき、悲しそうな表情をしていたのが、今ではそんな表情はめったにしないし、傷ついてもすぐに立ち直ってしまう。

一般的に、子どもが自己の世界を拡大していくことは、外的世界に積極的に立ち向かう態度と、そこから退

却し寛ぎを求める態度とを交互に採ることによって行なわれていく。この二つの態度が子どもの中で調和を保って立ち現われてくる時、子どもは飽くことなく外的世界に挑戦していくと思われる。

ところが、昔の遅くんは外的世界に対して非常に敏感で、極めて逃避的であった。ちょっと気持を傷つけられるようなことが起こると、たちまち保育者の許に逃げこんでしまい、自分一人でそれを乗り越えることなどとてもできない子であった。遅くんは保育者の胸に顔を押し当て、外的世界を自分の背後に退けてしまうのだった。遅くんがしだいに積極的に外界に関わるようになってきたから、何か嫌なことがあると、さっと保育者の許に逃げこんでしまうことはよくあった。しかし今では、一気以外の世界から保育者の許へ退却するという態度はほとんどなくなり、自信に満ちた積極的な態度が強まってきている。

——「泣きべそ」とトランポリン——

それでは出来事の考察に戻ることにしよう。

四、五年前までは、遅くんは何かつらい事態に直面すると、ひどく動揺し、そこから逃げ出し、保育者に保護を求める子であった。保育者の許に逃避し、その胸に抱かれている間、遅くんが自分で何かをするという態勢にはなかったことは言うまでもない。遅くんは自分自身の現実的活動を一切放棄し、保育者の許で心の動揺が和ぎ、活動への意欲が湧き上がってくるのをひたすら待つばかりであった。それでは、この出来事における遅くんの態度はどうであろうか。

遅くんが経験したつらい事態は、この日の朝新しい教室に行こうと誘われたことだった。遅くんは動揺した。しかしその動揺を、遅くんは加藤先生に抱かれることで克服し、新しい教室に入るといつつらい事態に加藤先生と共に挑んだ。ここには、保育者に抱かれるという逃避的な態度だけではなく、手助けがあるならばつらい事態に対しても立ち向かおうとする態度をも、遅くんは持っているということが窺われる。その挑戦の後、遅くんは

加藤先生とトランポリンのある部屋に来たのだった。

トランポリンの上に一人置かれ、泣きべそをかいた時、遅くんの心の中にはついさきほどのつらい事態が浮かび上がってきていたのである。遅くんはその蘇った動揺に再び耐えなければならなくなった。しかしこの時、遅くんは加藤先生に助けを求めることはしなかった。彼は泣きべそをかきながらも、一人でトランポリンをとび始めたのである。彼は蘇った動揺に自分一人で耐えようとしていたのである。この時、遅くんは、現実のつらい事態に直面しても少しも動じることなく、一人でそれに立ち向かって行ける程心が強いわけではなかった。そうかと言って、その事態に背を向けてしまい、それを見まといと自分の世界に閉じこもってしまうとか、あるいは保育者にしがみつくことで自分の活動を放棄してしまうというような、極端な逃避性ないし消極性の中にいたのではなかった。遅くんはこの時、本当に誰かに助けを求めたいくらいだったのだろう。でも彼はそうはせず、心の中に蘇ったつらい思いから顔をそむけず、一人でそれに

耐えようとした。つらいけれども、一人でそれに耐えようとするその心理が、泣きべそとなって現われたのである。実際に、泣きべそをかきながらもトランポリンをとり始めた遅くんの姿に、自分の力で何かをしようとする前向きな姿勢、活動への意欲が見て取れるだろう。

トランポリンは遅くんの大好きな遊具である。遅くんには、一方で、つらい気持を癒すために加藤先生の許に行きたいという気持があり、他方、大好きなトランポリンで遊びたいという気持があったのだろう。この二つの拮抗する、あるいは矛盾する気持の間に遅くんは立っていたのである。そして彼はトランポリンで遊ぶことを選んだ。それは彼にとっては、大変なエネルギーを必要とする精神的苦闘だったにちがいない。だから彼は泣きべそをかいたのである。

遅くんがトランポリンをとび始めたということが、彼がつかない事態に屈せずそれに立ち向かっているということとを、如実に示している。しかしそれ以前に、遅くんが二つの拮抗する気持を同時に抱いたこと自体が、そして

この二つの気持の間で心が揺れたこと（泣きべそをかけたこと）自体が、遅くんがまがりなりにも自己の直面したつらい事態に目を向けることができる位に、彼の自我が強くなっていることを示しているのである。さもなければ、一人にさせられた時、遅くんは何のちゅうちよもせず加藤先生を追って行くか、それとも悲しい表情をして加藤先生を呼ぶかしたことだろう。ところが彼はそうしなかった。自我が弱すぎる時には、対立し合う二つの選択肢の間で迷うことはないのである。なぜなら、その時には、彼の取るべき道は始めから一つしかないのだから。

——発達における「泣きべそ」の意味——

このように、遅くんは泣きべそをかきながら悲しい気持と闘っていたのである。実を言えば、遅くんが泣きべそをかくという事は四、五年位前まではなかったこと(三)なのである。それ以前には、自分の意がお母さんに通じなかつたり、心が傷つくような事態に出会うと、遅くん

は激しく泣いてお母さんに悲しみを訴えていたのである。彼が外界に積極的に出向いて行くようになると共に、彼は泣きわめくこともしなくなり、べそをかくようになってきたのである。

泣くことができるということは——それが泣きわめくことであろうと泣きべそをかくことであろうと——ある意味では、自己が外界からの衝撃を、自我を危機にさらす程強烈なものとは受けとられないということでもある。というのは、衝撃をあまりに強烈に感じてしまうと、人は泣く余裕すら失うと考えられるからである。(四)またある場合には、泣くことができるということは、自己が外界——に特に他者——に対して心を開いているという(五)ことでもある。言い換えればそれは、自己が外界と関わりとうとする態度を持っているということでもある。また、泣いている最中には、自己はつらい思いを外に向けて発散し、その思いを和げることができると。(六)

つまり、泣くという行為は——それがどのような泣き方であろうと——自己が外界からの衝撃を何とか受けと

めることができるということを前提にしているのである。その時自己は、外界との関係を決して断絶してしまふことはせず、どんなに僅かではあつても、外界と関わり続けようとする態度を保持しているのである。そして泣くことにおいて、非常に消極的ではあるが、自己は傷ついた自己を自ら支えようとしているのである。こうして泣くという行為は、外界と関わり続ける中で、自己の存在を保持しようとする自己の主體的活動であると言ふことができるだろう。

このような自己の態度が泣くという行為の基盤には根本的にあるのであり、その上で、自己が外界の衝撃をどのように受けとめ、それに対処するのかに応じて、泣きの形態が異なってくるのである。発達のに、泣きの形態は、まずは「声を上げて泣く」ことから始まり、「表情だけで泣く」泣き方、そして泣く行為が内在化された「心で泣く」泣き方というように分化し、多様化していくと考えられる。^(七)

話が少し一般的になり過ぎてしまった。ここでは、泣

くことの一一般論を展開することが目的ではなく、遅くという一人の男児がある状況の下で泣きべそをかいた、その時の心理状態を洞察することによって、「泣きべそ」の持つ発達のなある意味を捉えようとするのが目的である。そこで遅くに戻って、「泣きべそ」の意味をまとめよう。

遅くんがかつて激しく泣いたり、あるいは一気に保育者の許に逃げこんでいたのは、彼が外界からの衝撃をあまりに強く感じてしまい、それだけ多く保育者の手助けを必要としていたからである。そう考えると、遅くんが泣きべそをかいたことは、非常に意味深いことであると言える。何故なら、その時彼は悲しい思いをしながらも、保育者に手助けを求めないでいられたのだから。遅くんが泣きべそをかいたことは、つらい事態に直面しても、彼が自分一人でもそれに耐えられるようになってきたことの一つの現われだったのである。

以上の洞察から、次のように言うことができるだろう。「泣きべそをかく」ということは、自己が何らかの

現実のつらさに直面した時、そこから完全に逃げてしまふことはせず何とかその現実を目を向け続け、それと取り組もうとする前向きな姿勢を自己が取っていることの現われでもある。それは、自己が現実に対して背を向けながらも顔だけは現実に向けているとも言うような、微妙な心理状態にしていることを意味している。より抽象的に言うならば、それは、正か負かという二分法的な捉え方では済まされない、積極性と消極性ないし能動性と受動性の融合地帯に、自己が立っていることを意味しているのである。

「泣きべそ一般」をすべてこのように解釈することは控えねばならないだろう。しかし、「泣きべそ」には、状況によっては以上のような意味があるということを得ておくことは、子どもを育てる者にとって必要ではないだろうか。

〔注〕

(一) 顔は泣いているが、泣き声はほとんど出さない、つ

まり表情だけで泣く泣き方を「泣きべそ」と定義しておく。

(二) 遅くんは一九八五年四月現在、養護学校三年の男児である。以前は、彼は消極的で傷つき易い子であったが、今では積極的に遅しい子になっている。その姿から私は彼に「遅くん」と名づけた。なお、この命名法は山中康裕氏（京都大学）の方式に倣ったものである。

(三) これは今の時点でお母さんに伺ったことなので、かつて遅くんが全く泣きべそをかかなかったとは断言できない。しかし、昔遅くんが泣きわめいていたことは事実であり、今では泣きわめくことはないというのも事実である。

(四) ドイツの強制収容所において、囚人たちは、強烈な絶望感と死の不安に襲われ、一時的に無感動無関心の状態に陥ったことはよく知られている事実である。V・E・フランク『夜と霧』みすず書房 一九七一年を参照。

(四) エンカウンター・グループにおいて、強い孤独感を抱いていた人が、グループのメンバーに受容されると感じた時、彼はメンバーの前で素直に泣けるようになる。泣きながら彼は、自己の孤独感を切々と打ちあけるのである。その時彼は、自己の孤独感を直視し、自らそれを乗り越えることを始める。 C・ロジヤーズ 『エンカウンター・グループ』 創元社 一九八二 一五〇—一六五頁 を参照。

(六) カウンセリングにおいて、回復の過程で、患者が自己の抑圧されていた感情を涙ながらに語ることもある。恐らく、語ることに相俟って、泣くことが人の気持ちを軽くするのだろう。泣くことによって気持が和らぐのは、自己の弱さを他者が肯定的に受けとめてくれるという信頼感と安心感を自己が抱いているからなのだろう。カウンセリングの事例については、山中康裕『親子関係と子どものつまずき』 岩波書店 一九八五 九〇—九六頁 を参照。

(七) 日常的な観察から言って、乳児期の子どもは声を上

げて泣く。幼児期以降の子どもになると、泣きべそをかくこともよく見かけるようになる。我々大人は、努めて悲しみを表面に出さないようにする。なお泣く理由には、悲しみや不安のほか、感動もあるが、感動による泣きは本論文の範囲外である。また、乳児期から子どもは、自分の生理的欲求を母親に伝えるために泣いたり、他者の関心を引くためにわざと泣いたりする。本論文では、自我の発達という観点で泣くことを考えているので、そのような泣きも、ここでは考察の外に置いておく。

(東京大学大学院)